

シンポジウム 「中高年者の高所登山及び トレッキングを科学的に考える」

科学委員会・北野 忠彦



2002 年 (平成 14 年)

1 月号 (No. 680)

社団法人 日本山岳会

The Japanese Alpine Club

定価 1 部 150 円

目 次

シンポジウム「中高年者の高所登山及びトレッキングを科学的に考える」	1
高所登山者の増加とアンケート	4
第四回秩父宮記念山岳賞の表彰	5
秩父宮記念山岳賞を受賞して	5
「国際山岳年」日本委員会の発足	6
支部だより	7
秋田 岐阜 山梨 宮崎	
Climbing&Medicine	9
報告	
学生部・マラソン大会	10
図書(委)・第10回「山を語る」	10
ジャック93会・登山集会	11
東西南北	
南極研究科学ワークショップに参加して	12
2001年秋の山行	12
伊吹山の「播磨祭」	13
パンフ・マウンテン・ブック・フィルム・フェスティバル	14
海外の山	15
「会員名簿2001」正誤表	16
新入会員・図書受入報告	17
図書紹介	18
ルーム日誌	20
会務報告	21
INFORMATION	23

▶ 日本山岳会事務(含図書室)取扱時間
月・火・木……………10~20時
水・金……………13~20時
第2、第4土曜日……………閉室
第1、第3、第5土曜日……………10~18時



98名が参加し、パネルディスカッションも活発に行われた

■基調講演は山本正嘉氏

昨年のアルパータ登頂七十五周年記念トレッキングに多くの会員が参加したことから見られるように、中高年の高所登山・トレッキングにおおきな関心が寄せられている。このような現状を背景に、二〇〇一年十一月十七日(土)十三時三十分から十七時三十分まで、千代田区東京都高年齢者就業センター「シニアワーク東京」講堂で、科学委員会主催の表記シンポジウムが開催された。

まず、科学委員会担当藤本理事の総合司会で始まり、石田科学委員長の挨拶の後、鹿屋体育大学スポーツトレーニング教育研究センター助教授・山本正嘉氏の基調講演「運動生理学の観点から必要な

心構えと準備を考える」が行われた。山本助教授には、一九九八年に行われたシンポジウム「科学的にとらえた中高年登山」に続き再度講演をお願いした。

内容は、①日本ですべきこと、②現地ですべきことに分かれ、日本ですべきことの初めに、高所(順化の問題)と、登山・トレッキング(体力の問題)という二つの要素に分けるといふ概念が出された。つまり、八〇〇〇m級の峰の高所登山であれば、冬季の北アルプスを登れる体力と、それを八〇〇〇m級の高所で行うための高所順化に分けて考える。四〇〇〇m付近のトレッキングであれば、無雪期の、例えば奥多摩のハイキングコースを歩く体力と、それを四〇〇〇mで行うための高所順化とに分けて考え

るといふものである。

日本ですべきことのうち体力トレーニングについては、中高年登山者一万人余りに対するアンケートでは、疲労やトラブルは年齢・性別よりも山行頻度、下界でのトレーニング量が大きく関係していたという。衣食住の悪環境に耐えながらのトレッキングでは、日本での低山歩きが何日か続けて行えること、高所登山では冬山の装備・技術を備えたうえに、装備重量に耐えることが必要で、目的の山に応じたトレーニングが要求される。

八〇〇〇登頂者の日常トレーニング法では、ランニング、実際の登山がそれぞれ、五八%、四七%と多く、基礎体力として、低山では一〇〇〇登を二時間で、富士山五合目からは三時間三十分で登れることが高所登山のひとつの目安になる。トレッキングではこれにこだわることはない。

高所順化トレーニングについては、パルスオキシメーターで動脈血酸素飽和度(SpO_2)を測定すると、平地での九七・九八%が、四〇〇〇登では八〇%ほどに低下する。これには個人差が大きい。日本では四〇〇〇登に近い山は富

士山だけであり、富士登山はそれなりに有効で、三〇〇〇登超で SpO_2 は七〇%にまで下がる。

一七〇〇登付近の、奥多摩の長沢背稜の縦走や、高度五〇〇登差の心拍数一八〇を超える坂道ランニング、下界での全力疾走でも SpO_2 はせいぜい九〇%にしかならない。また、二〇〇〇登の低山でも四泊すれば、四〇〇〇登相当の順化はできると思われる。低酸素室で、二〇〇〇登ぐらいの酸素濃度で四泊ほどするのも効果がある。体力はつきにくく落ちにくいが高所順化はできやすく落ちやすい。高所順化は二週間ぐらいで落ちるので、平常から体力増強を行い、直前になって高所順化トレーニングを行う「期分けトレーニング」を行うとよい。

八〇〇〇登頂者の高山病にならないための留意事項としては、「ゆつくり歩く」「水分補給」「呼吸法」があげられた。歩く歩数は日本の山の七割ぐらいがよいが、五割ぐらいのつもりで歩くところと七割になる。水分補給は、食物からの水分を含めて一日四・七リットル。少量多数回補給する。食物はゼリー状の流動食の評価が高い。

ビタミン剤や鉄、Ca剤などに留意。

呼吸法は腹式呼吸が有効。深呼吸よりよい。ピンポン玉吹き、ローソク吹きなど口をすばめてゆつくり吹くと腹式呼吸になる。普段から練習しておくこと。お経を読むのも効果的。また、座位で前屈し、深い呼吸をする。横になると SpO_2 が低下する。

高山病の時は、安静にしているよりも起きあがる、動くなどしたほうがよい。睡眠時は SpO_2 はきわめて低下する。

急性高山病重症度判定スコア(AMSスコア)を利用して、自己体調をチェックするとよい。

酸素ボンベは、八〇〇〇登で二リットル使用すると、体感高度は六〇〇〇登ぐらいになったという例が多いが、個人差が大きい。いずれにしても低い山から徐々に高い山に向かうことが重要である。

■具体例をあげて意見交換

休憩後、三人のパネリストを迎え、山本氏も含め、筆者の司会でパネルディスカッションのセッションに移った。三人のパネリストからのコメントを紹介する。

一、海外トレッキングツアー経験

者としてのコメント―横溝嘉津子氏 静岡県駿東郡長泉町・主婦
地元で中高年の山歩きの会に入り、年に二、三回歩いていた。一九九三年の石割山が初めてで、階段と雪がつかつたが富士山がよかった。ゆつくり歩けば山に登れると実感した。

昨年、七十歳の仲間とキリマンジャロに行ってきた。体力をつけるためにほぼ毎週山に行った。帰国後体重が五キログラム減、さらにその後減って、ひざの痛みがなくなった。

登山中は話し声を小さく、荷を少なくし(カメラは持たず)、ゆつくり歩き、腹式呼吸に注意した。ツアーリーダーから水分は回数多く摂り、排尿をいとわないように注意された。登頂前にはダイアモックスを服用した。精神的ストレスがたまらないようにコミュニケーションが大事とわかった。

どこでも眠れ、食事が摂れるのがよかった。自分の嗜好品があるとうい。ツアーならば、指示に従えば安全である。

二、海外登山・トレッキングの現場から―貫田宗男氏(株)ウエック・トレック代表

海外登山・トレッキング専門の

旅行社十社の昨年の参加者は約八千人で、そのうち高所を訪れたのは二千二百人、そのうちの千二百人が五十歳以上であった。

高所登山・トレッキングでは毎年千人に一人程度死亡例がある。

高所の事故には、慢性疾患、個人手配によるトレッカー、事前の健康診断の不備、高山病対策の不備、治療基準の不備などによるものが多い。高山病対策には、現在ではラシックスは使わない。

ガイドにリーダーシップがないための事故もある。機器があれば安全性が高まる。衛星通信は有効で、脳卒中などの患者を衛星電話を通じて三時間以内に収容することが可能である。中高年者は金と時間がある例が多く、それによって安全性を高めることができる。いずれにしても自己責任、自己管理が重要である。

三、登山と睡眠薬 ―カラコルム登山隊の事例―堀井昌子 平塚保健福祉事務所長

六〇〇以上の高所を目指してヒマラヤに入った日本人はこの五十年間に一万一千五百八名に上り、そのうち遭難死は二百五十五名であった。二百五十五名中四十

歳以上は三十九名であった。

原因は気象要因(雪崩)五二%、高所要因(高山病)四二%である。また、六〇〇以上の未満の登山・トレッキングで死亡した人はこの三十年間に六十一名、うち、四十歳以上の人は三十三名であった。高所で具合が悪くなった人は中高年に多い。

国内の登山者についてみると、七〇年代に比べ九〇年代になると中高年者の割合が増えるとともに事故件数も増加し、その約八〇%を中高年者が占める。事故原因としては、滑落、道迷、転倒、転落について病気の順となる。

高所登山・トレッキングでは出発前のメディカルチェックを、特に心肺系について行う。問題となる疾患では、心血管系疾患、呼吸器系疾患、高血圧、糖尿病、消化器系疾患などがあり、健康診断が必要である。慢性病の場合は、特に日常的な自己管理が必要である。

体力・トレーニング関連

この後、山本氏も交えてパネリストスセッションを行い、会場からも多くの質問が出された。転落などの事故は筋力の低下によるものが多い。昔は鳴らした三

十年ぶりという元登山家よりも現在登っている主婦のほうが強い。

下りでの筋肉痛、足が痛い、ひざが痛いなどは脚力が弱い。筋力トレーニングにはスクワットが有効。階段の上り下りもトレーニング効果はあるが、日常生活の階段歩きではあまりにも量が少ない。「特異性の原則」があり、登山には登山が一番である。山に行ったら、下界で何が足りなかったかを考え、それを補うようなトレーニングを。腹式呼吸は十人中、二、三人はできない。普段から練習を。

衛星電話は小型で(トランシーバー並)、レンタルで手に入れることができるので、持っていくことをすすめる。

高所に強いアレル(山六七六号、九月号 Climbing&Medicine 参照)を調べた結果、I-IかI-DでDは見られなかった。欧米人では日本人に比べて明らかにI-Iが多い。

医療関連

持薬については、高所で問題ないか、主治医とよく相談のこと。山を知っている医師がよい。睡眠薬とアルコールは危険。抗生物質もそうだが、ダイアモックスは医

師の処方がないと入手できない。高山病はダイアモックスの適応症に入っていないので、一般的には入手はきわめて困難である。ラシックスは使わないこと。デキサメタゾンには抗炎症剤で脳浮腫に有効。予防薬ではなく、治療薬である。足がつるのは寒さ、水分不足などが原因で、防寒、水分補給、などで予防する。電解質飲料があればさらによい。

このほか様々な質問、意見が出されたが時間となり、最後に藤本理事が閉会の言葉を述べ、定刻に終了した。出席者九十八名。

●カタログをご請求ください。



▲総合カタログ



▲NZの山旅



▲日本の山旅

国土交通大臣登録旅行業第490号/社団法人日本旅行業協会正会員 ⑤ 旅行業協会員
アルパインサービス株式会社

〒105-0003 東京都港区西新橋1-12-1 西新橋1森ビル2F TEL.03-3503-1911
大阪/TEL.06-6444-3033 名古屋/TEL.052-581-3211 福岡/TEL.092-715-1557

高所登山者の増加とアンケート

高所登山研究委員会・坂井広志

平成十三年度、秩父宮記念山岳

賞を受賞された山本正嘉さんは高所登山研究委員会で行なった「八〇〇〇峰登山者アンケート」で中心的な役割を担いました。

このアンケートを行うに至った理由は日本人登山者が高所、特に八〇〇〇峰登山を目標に定め、多くの登山者がその頂に立てる時代に入ってきたからです。昔の探検時代あるいは八〇〇〇峰未踏の頃とは比較にならないほど、今や私たちは簡単に希望する山の懷まで入ることができます。

一九九八年度版の日本ヒマラヤ協会のデータによれば、一九五六年のマナスル初登頂以降、日本人による八〇〇〇峰の実登頂者は三百二十五名(複数回の登頂者を数えた延べ登頂者数は五百十八名にもなります)、とりわけ、ここ十年間だけみても八〇〇〇峰実登頂者は二百名を超えました。一方、登山隊の数で見れば一九八〇年代以降、八〇〇〇峰に向かう登山隊は全体の三分の一になっていま

す。

このような時代に移った背景としては、登山隊を受け入れる国が登山者に対して、さまざまな体制を整えてきたこと、登山装備や食料の軽量化や高品質化、酸素器具の性能向上、現地登山情報の簡単な入手等々が挙げられます。

しかし高所の環境は人体にとって過酷な場所であることにより変わりはありません。この高所の状況は平地では低圧酸素室など擬似的に設定することはできませんが、実践の登山の環境状況と全く同じにすることはできません。個々人の身体能力や経験の積み重ね、そのときの周りの状況などによって高所登山の行動能力は大きく異なってきます。

そのため、今回のアンケートはたくさんさんの八〇〇〇峰登頂者から、トレーニングから高所順応方法などの体験談や意見を集め、そのデータから傾向や特性を探ろうと考えました。

今回、八〇〇〇峰登頂者百五

十六名の方にアンケートをお願いしましたら、七五%にあたる百十七名から回答をいただくことができました(この百十七名のうち日本山岳会会員は四十二名もいる)。まもなく報告書を完成発行する予定です。

さて、受賞者の山本正嘉さんは自ら高所登山体験も十分持つていることです。このアンケートの分析集計は理論だけでなく、自らの経験がベースとして背景にあることは大変重要なことです。一九八〇年シブリン北稜初登攀、一九八五年アコンカグア南壁アルパインスタイル登攀、一九九五年チョー・オユーの無酸素登山と、数多くの高所体験を持つております。なかでも一九八〇年のシブリン北稜初登攀は東京大学スキー山岳部の若いOBチームにより結成されたこの難峰の未踏ルートを見事に登攀した業績は今でも世界の山岳記録に特筆されるすばらしい内容です。また、国内でも積雪期の日高山山単独縦走や山岳耐久レースへ参加するなど、現場での登山経験を重要視し厳しく自分に課してそれにチャレンジし続けながら研究も同時に行なう姿勢を維持しつづ

けています。

その集大成は昨年出版された『登山の運動生理学百科』という本で、登山の初心者からヒマラヤを目指すクライマー、またフリークライミングに至るまで幅広い対象者にわかりやすい解説内容で登山の運動生理学を解き明かしており、登山者の指針となるべき良書と言える内容です。さらに各種山岳雑誌への発表や講演会などを通じての活躍等、登山界に対し重要な貢献を継続的に行っており、このたびの受賞を機にさらなる活躍を期待したいところです。

登山10周年記念 山岳会関係者のために

テーマ: 中高年のより安全、快適な山歩きのための日頃のトレーニング

講師: 山本 正嘉氏(国立鹿屋体育大学助教授)

著書「登山の運動生理学百科」

期日: 2月17日(日) 12:30~14:30

場所: 新宿サンエービル9階(弊社入居ビル)

※入場無料です。必ず事前にご予約ください。

お問い合わせを アミューストラベル

〒160-0023 東京都新宿区西新宿 1-22-2 新宿サンエービル B1

☎03(5325)1256 FAX03(5325)1258

大塚 06(6456)3366 名古屋 052(588)5617

広島 082(502)2525 福岡 092(735)8855

第四回秩父宮記念 山岳賞の表彰

副会長 長尾 悌夫

平成十三年度の第四回秩父宮記念山岳賞には、四件の応募があり、審査委員会では学識経験者の意見も聴取しながら慎重に審議をすすめ、山本正嘉氏の「登山活動における運動生理学およびトレーニング科学の確立と啓蒙活動」が最も授賞にふさわしいとの結論に達し、木下是雄審査委員長から会長へ推薦し、十一月十四日の理事会で承認を得た。山本正嘉氏の業績は次のとおりである。

山本氏は長年にわたり登山を運動生理学およびトレーニング科学の観点から研究し、得られた成果を学術論文として発表する一方、解説、講演、著書などを通じて一般登山者にわかりやすく啓蒙してきた。また、自身登山者としてヒマラヤ、南米等の遠征に参加し、自身をも被験者としてデータの収集につとめ、それらの分析結果を加えて『登山の運動生理学百科』を発刊した。

この書物は、第一章・登山と健

康、第二章・登山と疲労、第三章・中高年、女性、子供の登山、第四章・登山と体力トレーニング、第五章・クライミング、第六章・高所登山、という構成であり、常に安全登山を念頭におきながら、わかりやすく解説されていて、一般登山者に益するところ大である。

これらの業績や啓蒙活動は秩父宮記念山岳賞にふさわしいと判断された。

なお、年次晩餐会での表彰に先立ち、当日別室で、受賞を記念して、中高年の安全登山をテーマに、アンケート調査の分析結果を踏まえて興味深い講演があり、聴衆に感銘を与えた。

秩父宮記念山岳賞を 受賞して

山本 正嘉

このたび、大変名誉ある賞を受賞させていただきました。日本山岳会には様々な分野で、私よりずっとこの賞にふさわしい研究や実践を行っている先輩がたくさんおられることを思うと、恐縮します。推薦や審査等でお世話になった

方々に厚くお礼申し上げます。

また私の研究は、山そのものではなく、山の中を歩く人間が対象です。つまり多くの登山者の方の理解と協力がなければ、私の研究は成り立ちませんでした。これら全ての方々に心からお礼を申し上げます。またそのお陰で、多くの素晴らしい登山者と知り合えたことは、私の生涯の宝です。

思えば三十年前、中学三年生の春に、坂倉登喜子さんのガイドブックを手に、一人で秩父の武甲山に登った日が、私の登山人生の始まりでした。またその夏には、友だちと三峯山に行きましたが、暑い日で、秩父宮様のレリーフの下で休み、汗を拭いて涼んだことをよく覚えています。その坊主頭の少年が、レリーフの主を冠した賞をいただくなど、誰が想像できたでしょうか。

大学時代、山に熱中して落第し、もつと真面目に勉強しろと親から大目玉を食ったことや、山に行くたびにさんざん心配をかけたことも、昨日のこのようです。この賞をいただいたことで、父も昨年亡くなった母も、親不孝だった私を赦してくれると思います。大学で体育学科に進学し、運動

生理学やトレーニング科学を専攻した理由も、単に山に行きたいからでした。研究をしに山へ行くという口実を設けて山で遊び、余力があれば自分の身体を実験台にして申し訳程度にデータを取ってくる、というところから私の研究は始まりました。それは今も大して変わっていません。私の研究はごく単純で、中学校の理科実験のようなものです。ただし、それがかえってわかりやすくてよかったのかもしれない。

いつも書くことですが、山で怪我や病気をしたときにどう対処するかを考えるのが医学です。これに対して、このようなトラブルをあらかじめ予防し、より安全・快適・健康的に、あるいはより高度に登山をするためには身体をどう扱えばよいか、またどのようにトレーニングすればよいか、を考えるのが運動生理学やトレーニング科学の役目です。

どちらも車の両輪のように大事なことなのですが、前者に比べ後者の研究をする人は昔も今もごくわずかです。これを機に、この分野への関心がさらに高まるとともに、研究をする仲間も増えてほしいと願っています。

「国際山岳年」 日本委員会の発足

江本 嘉伸

二〇〇二年、国連が定めた「国際山岳年」がいよいよスタートした。この一年、山々の環境と山麓の文化の見直しをおもなテーマとして、世界各国で多様な行動が繰り広げられる。

一九九二年、リオデジャネイロで開かれた地球サミットで、二十一世紀の地球環境の保全をめざす「アジェンダ21」が採択された。「国際山岳年」は、この「アジェンダ21」の山岳地域の環境保護をめざす内容を盛りこんだ「第十三章」に基づくものである。

地球温暖化にさらされ、山々は、



身近な山を見直す一高尾の森づくり(12月8日・江本撮影)

見たほどには強いものではない。意外に脆い山々を世界の山を愛する人間たちの力で護ろうではないか、という趣旨である。各国で国内委員会が発足し(十二月現在、四十六カ国を数える)、日本でも十一月、田部井淳子氏を委員長に、日本委員会が発足した。

山々を大事に考える、学術、登山界の代表たちでつくられたこの委員会は向こう一年、各地で展開される山岳をテーマにした企画、行事を支援し、情報と人のネットワーク作りをめざしている。山々を舞台にした全国各地の独自のイベントを支援する、という仕事

は富士山(六、七日)と大雪山(十二、十四日)で、フォーラムが企画されているほか、国際山岳連盟に呼応して、九月十四、十六日の連休には全国一斉にさまざまなイベントが催される予定だ。

登山の世界で特筆されているのは、山岳団体がそろってひとつの仕事をやろう、と立ち上がったことだ。このことは、かつてなかったことである。二〇〇二年を目前にした十二月二十一日には、東京・神保町で新年の山岳年に向けて日本委員会の会合がもたれたが、田部井委員長のほか日本山岳協会の田中会長、日本勤労者山岳連盟の西本理事長、日本山岳会からは担当の高遠宏理事らが出席し、二〇〇二年への取り組みについて、熱心な話し合いがもたれた。

「国際山岳年」といって、何もはでほしい国際イベントをやろう、というわけではない。むしろ、日本の里山に代表される身近な山々を見直し、そこに学ぶことがもつとも中心の仕事になるのではないか、と思う。その意味で日本山岳会自然保護委員会が進めている「高尾の森」づくりなども、貴重なモデルのひとつとなるだろう。

また、山岳年の趣旨を考えれば、科学委員会その他におもしろい発想のできる知恵者はいくらでもいるように思う。「国際山岳年」を自分のこととしてとらえる一伝統ある日本山岳会の会員の皆さんに期待したい。

国際山岳年日本委員会リストは次ぎの通り。(二月一日現在)

特別顧問愛知和男(元環境庁長官、日本エコツアーリズム推進協議会会長) 梅棹忠夫(国立民族学博物館顧問、財団法人千里文化財団会長、京都大学名誉教授) 吉野正敏(筑波大学名誉教授、国連大学上級顧問、元日本地理学会会長) ●委員長 田部井淳子(HAT、J代表、環境省中央環境審議会委員) ◆委員 小野有五(北海道大学教授、日本地理学会国際山岳年対応委員会委員長) 神崎忠男(HAT、J理事長) 酒井秀夫(森林利用学会理事、東京大学教授) 田中文男(日本山岳協会展長) 西本武志(日本勤労者山岳連盟理事長) 森本尚武(信州大学学長) 山森欣一(日本ヒマラヤ協会理事長) ◆事務局 江本嘉伸(ジャーナリスト)



かつて樹林で薄暗かった山頂も眺めはよい

大仏岳登山

秋田支部

JAC 支部だより



全国各地の支部から、独自の活動状況をレポートします。

二〇〇一年の秋山山行は九月十六日、太平山地の秘峰・大仏岳(二一六七^{メートル})で、二十二名が参加して実施された。大仏岳は太平山の東端に位置し、その呼び名が縁起のよいこと、一等三角点があることから、近年登山界に知られわたり、愛好者によって登られ、親しまれている山の一つである。

これまで西木村側からの登山道はあったが、数年前から牛首上部で廃道化が進み、藪こぎを余儀なくされていた。昨年、阿仁町で小岱倉林道より新たに登山道を整備し、最後に残されていた山頂直下の藪も、登山実施の二日前に加賀谷昭一氏の尽力の下に切り拓かれ、比較的楽に登れるようになった。

早朝、秋田市を車で出発。加賀谷氏の案内で阿仁・比立内から小岱倉の長い林道を走り、終点の駐車場から登りはじめる。杉林の中の旧道を整備した道は山腹を巻くようになり、やがて旧道から分かれて山頂から延びた急登の尾根に取り付く。この先、主稜線直下で左に巻いてゆくと、すぐ山頂に飛び出した。約二時間半の行程であった。

かつては樹林で薄暗かった山頂

も広く刈り払われており、眺望良好となっていた。山頂には太平山地では珍しい池塘もあり、すぐ南隣には「堀内明神」の迫力抜群の岩峰も望める。残念ながらガスが出て、満足するほどの眺望は得られなかったが、参加者の大方は初めてこの山でもあり、広々とした山頂での昼食は大いに盛り上がった。

(佐々木 民秀)

岐阜支部

四支部共催の

第三回「森の勉強会」

第三回森の勉強会が二〇〇一年十月二十七、二十八の両日にわたって、滋賀県朽木村の財森林文化協会朝日の森自然研修所および京都府美山町にある京都大学演習林、いわゆる芦生の森において開催された。今回から岐阜支部も加わって、東海、京都、関西の四支部の共催となった。参加者は三十五人(東海十四人、京都十人、関西五人、岐阜四人、首都圏一人、会員外一人)。

十月二十七日 座学・野外実習

講師は植物生態学者の吉良竜夫氏の教え子でもある琵琶湖研究所

の金子有子氏と、地元に住んでいる芦生の森に詳しい飯高恒夫氏のお二人。

金子氏の講義は多岐にわたるが、あえて要点のみを述べると、日本の森林の特性は温帯では稀に見る森と樹木に恵まれている点をあげたい。そしていわゆる里山では新炭林や採草地、有用樹の植林地など様々な利用が行われ、しかもこれがパッチ状に混在しているのが特徴である。ところが近年は過疎と高齢化による手入れ不足からこれらの林地が一見荒廃しつつあるように見えるが、むしろ自然林への移行過程にあるものと理解したほうがよい、と示唆に富むお話があった。

飯高氏からは芦生の森について自然的、歴史的な解説があり、冷温帯と暖温帯の植生が混在し、樹種が極めて多いことを指摘された。午後からは施設を取り巻く朝日の森で自然観察を行った。

十月二十八日 野外実習

早朝に宿舎を出発して、針畑川を遡り朽木村生杉の奥に車を置く。ここから飯高さんたちが再開発された旧道を歩いて地蔵峠に向かった。峠で三班に分かれ、A班は長治



35人が参加して専門家の講義を受ける

谷作業場跡から少し戻って野田畑を目指した。これを過ぎた辺りからが庄巻で、日本の原風景が杉尾峠まで続いている。広葉樹の紅葉とその間に点在する芦生杉のコントラストには印象深いものがあつた。枕谷まで引き返して三国岳へ登った後、滋賀県側のブナ林を歩いてゲートの前に下り立った。

B・C班は、上谷と下谷の出合い付近から八宙山へ急登。ここからは緩やかなアップダウンを繰り返しながら芦生ならではの樹種の多い素晴らしい尾根道を快適に進む。遷移、極相など野外実習にふ

さわしいサンブルがいたるところにあり、自然界は生産と消費と分解によりうまく循環、再生産されているが、人間社会は「分解」が欠けた不完全なシステムである云々、インストラクターの巧みな話に耳を傾ける。

ブナノ木峠で小憩後、ケヤキ坂を下って下谷沿いに林道を溪流植生を観察しながら中山へと戻った。こうして有意義な勉強会は終わったが、地球の未来について真剣に考えさせられた二日間であつたというのが参加者の大方の感想である。

(高木 泰夫)

山梨支部

二〇〇一年秋の山行 八ヶ岳三ツ頭

十月二十日秋晴れの中、天女山の駐車場を八時四十分に出発。脚力の衰えたMさんもあり、スローピッチだったが、木々の紅葉と富士山や南アルプスの展望を楽しみつつ、十二時三十分、何とか前三ツ頭まで登る。ここでパーティーは、昼食を取る組と三ツ頭と権現岳を往復する組に分かれる。昼食組は、快晴の展望に気をよくして、

縦走路右脇の広場で一時間以上もトグロを巻いて十分な休養をとる。一時三十分には下山にかり、四時過ぎには天女山駐車場に戻る。

本日の宿泊先は八ヶ岳の麓、長沢会員の「ロッジ山旅」である。

夜には古屋支部長も駆け付け、支部の百周年記念事業を何にするかなど語り合いながら、四方山話に花をさかせて痛飲する。

十月二十一日、本日も快晴。当初予定した山麓ハイクは、八ヶ岳ロードレースと道が競合することから、奥秩父瑞牆山麓に足を延ばし、まだあまり知られていない十一面岩の「カンマンボロン」を訪ねる。登山道は、今年の全国植樹祭の会場地ということもあり、大変便利になっていた。

午後は麓の金山平で、支部員でもある山梨岳連の高室会長一行と合流し、支部・岳連・地元との共催行事で、奥秩父の名付け親である故木暮理太郎翁を偲ぶ「木暮祭」に参列する。式典後、増富観光協会の皆さんの心尽くしの「キノコほうとう」とビールをご馳走になり、紅葉を十分堪能して散会した。好天に恵まれ楽しい時を過ごさせてもらった。

(坂本 桂)

宮崎支部

第十七回宮崎ウエストン祭と祖母山行

■ウエストン祭は開かれた

秋雨が驟雨のように騒ぎ立てる気象条件の中、ここ高千穂町三秀台で第十七回宮崎ウエストン祭は開催された。百十一年前、ウオルター・ウエストン牧師が宣教活動のため日本を訪れ、登山家でもある師は富士山について二番目に登山したという祖母山は、時折、霧



紅葉の千間平、國観峠を経て祖母山頂へ

Climbing & Medicine・5

高山病予防薬の是非

村上 和子

海外登山・トレッキングなどが比較的行きやすくなってきた現在において、ダイアモックスという薬が高山病に有効であるという情報は、何となく頭の中に入ってきているのではないだろうか？

実際、ダイアモックスを参加者に服用させているツアーも少なくないようだ。かく言う筆者も、高山病を経験しているから、高山病予防にダイアモックスを服用することになっている。高山病になってしまったときの体力の消耗は激しく、元の体力に戻るにはたいへん時間がかかってしまう体験が、ダイアモックスを予防薬として服用するきっかけになったのだ。また、同時に高所に弱いのではという自分の不安を打ち消すためでもあった。

ただ、ダイアモックスも薬であり、比較的副作用の少ない薬物とはいっても、からだに

とって異物であることには変わらない。薬物だということは否定できない事実なのである。また、記録に挑戦・自分に挑戦といった登山においては、高山病予防薬というのは許せない存在であるだろう。挑戦という名において、薬物を服用するということは広い意味でドーピングにも相当する行為であるらしい。

しかし登山においては、朝になったら亡くなっていたという痛ましい事故はダイアモックスを服用することによって防ぐことができるのであれば、あまり"strict"になることはないかもしれない。

日本ではダイアモックスの高山病予防としての薬効は、最近になって公に認められた。一般にも注目されてきたように思う。しかし、聞くところによると、海外ではダイアモックスではなく次の薬の時代がきているらしい。

とにかく、登山の何に重きをおくかでダイアモックスの服用の是非が決まってくる。それは、自分の考えで決めることであり、他人が押しつけることではない。

最後に一言。いくら高山病に有効といえども、薬に頼ってトレーニングを怠ることは、言語道断である。

雨の中にその雄姿をのぞかせ参加してくれた。

ウェストン師の遺徳を顕彰するレプリカと鐘の鳴る丘・三秀台には、五ヶ所小学校全校生徒四十四のつづらな瞳が輝く。参加者百五十人が見守る中で献花・点鐘・黙祷・関係者の挨拶、大谷優支部長の散文詩の朗読、石井久夫会員(自然保護委員)による「宮崎の野鳥と自然」のミニ講話に続き、小学生を中心に「エーデルワイスの歌」を合唱して式典は終了した。

大谷支部長がウェストン師のレプリカに向かって朗読した詩の一説に「山を愛し山を尊ぶ老若男女が相集い あなたを思いあなたの前に追慕の鐘を鳴らし 感謝の花をささげる……」と。

■三十二人の児童合唱に大拍手

宮崎ウェストン祭の前日(十一月二日)は、宮崎支部十一月の定例山行・祖母山(二七五七m)。参加会員は四十七人。百十一年前の明治二十三年十一月六日、ウェストン師が登った一の鳥居を過ぎた北谷登山口から、まさに金と銀の装いの衣を脱ぎ捨てようとする晩秋のブナ・ミズナラ・ケヤキ・カエデ類の裸木と紅葉の中を千間

平・國観峠を経て、十四時山頂に立つ。参加者のだれもが祖母傾山系の稜線を南から北に流れる雲間に墨画に似た久住連峰・阿蘇の山並みを遠望しつつ悠久の「とき」をどう回顧したのであろうか。

前夜祭は、恒例によって特設会場において祖母嶽神社宮司の神事に始まり、大人の五ヶ所神楽に続き、小学生による子ども神楽が披露された。笛・鉦・太鼓のリズムは抜群で、太鼓を叩く少年と踊り手のリーダーとの心技体一致の舞に参加者は固唾を飲んだ。圧巻は三十二人の五ヶ所小学校児童が一年間練習を重ねた合唱・歌の発表であった。終わると惜しみない大拍手が送られた。

アトラクションの合間には、地元の方々が振る舞ってくれるカッポ酒とヤマメの塩焼きを頬張りながらの談笑はつきず、小学校の若い夫婦教師によって特大の櫓に点火されたキャンプファイヤーの炎は高さ一五mに達し、晩秋の天空を焦がした。

尊き山の教えを受けながら、身も心も穢れも消え失せた前夜祭とウェストン祭であった。

(井野元 繁)

報告

REPORT
1月

学生部

マラソン大会を開催

二〇〇一年十一月十八日、日本山岳会学生部マラソン大会が行われました。本大会は大学山岳部の学生が、日頃のトレーニングの成果を披露する場として、例年皇居周辺で開催されるものです。

午前には団体戦(皇居一周五^{キロ}×四人)、午後には個人戦(男子三周^{五キロ}、女子二周^{一キロ})が行われました。参加者は団体戦八十人余り、個人戦四十六人と、大学山岳部の事故が続いた一昨年と比べて参加者も多く、熱戦が繰り広げられました。

結果は、団体戦は法政大学の初優勝、男子個人戦は東海大学山岳部の平出和也さんが三連覇を果たしました。女子個人戦は、今年か

日本山岳会の各委員会
同好会の活動報告です。

ら「浜田純子杯」となりました。これは二〇〇〇年、一九九九年の女子個人戦優勝者で、昨年一月に船窪岳直下にて遭難死された東京農業大学山岳部の故浜田純子さんを追悼する意味で設けられたものです。東海大学山岳部の小松由佳さんが後続に五分以上の差をつけて、栄えある初代浜田純子杯保持者となりました。

近年、大学山岳部員の減少は著しく、ようやく四人の団体戦を組めるといった状況の部が多いようです。今回も単独で二チーム組むことができた大学は、法政、早稲田の二校だけで、人数不足のため急遽組まれた混成チームも三チームありました。このような状況の中で、各大学山岳部の交流の場である日本山岳会学生部も、一層重要なものになっていくことと思わ

れます。

(早稲田大学山岳部・有村哲史)

二〇〇一年マラソン大会成績
団体戦Ⅱ五^{キロ}×四人

優勝 法政大学山岳部A(二時間十八分二十七秒)

準優勝 青山学院大学山岳部

三位 関西学院大学山岳部OB

男子個人戦Ⅱ一五^{キロ}

優勝 平出和也(東海大) 五十八分五十五秒

準優勝 岡本祥幸(芝浦工大)

三位 北口創尉(法政大)

女子個人戦(浜田純子杯)Ⅱ一〇^{キロ}

優勝 小松由佳(東海大) 四十分二十一秒

準優勝 丸山裕子(学習院大)

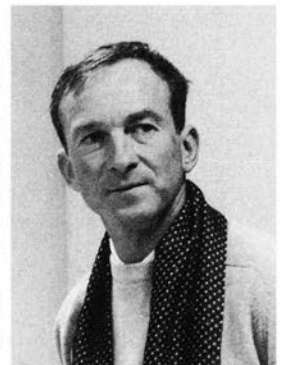
三位 内野麻衣子(学習院大)

図書委員会

第十回「山を語る」

スロベニアの登山とスキー

二〇〇一年十一月二十日、スロベニア出身で一九八八年から日本で登山活動をしているツベート・ポドロガルさんにスロベニアを中心に、アルプス、ヒマラヤ、日本での登山体験をスライドを交えて語っていただいた。



講演者のポドロガル氏

日本ではスロバキアと混同する人もいて、馴染みの薄い国であるが、南はアドリア海に面し、北と西はオーストリアとイタリア・アルプスに連なり、東はクロアチアとハンガリーに接する。四国ほどの面積に二百万人が住み、九〇%以上がスラブ系のスロベニア人で、ローマカソリック教徒である。古代から多くの民族移動や抗争の真只中にあつたため、かえって独自の文化や言語が守られてきた。屋外スポーツは歴史的に盛んで、スキーでは世界的メダリストを輩出している。

登山は、子供から老年まで多くの国民が親しみ、人口の一六%がスロベニア山岳会会員である。山岳会は、たくさんの山小屋を持つ、ユリアナ・アルプスでのスキー、クライミング、ハイキングのほか、湖や溪流のカヤック、パラグライダー、カルスト地形に散在する鍾

乳洞のケービング、アドリア海でのクルージングなども盛んに行われている。山の天気が悪ければ川下りに行く、というわけだ。

スロベニア山岳会は、アルパインクライミング、フリークライミング、ヒマラヤ遠征、ガイド養成など、たくさんのカテゴリー別に指導教育システムが確立し、クライミングジムが各地に設置されていて、小学生から系統立った指導を受けている。ちなみに平山ユージは、スロベニアで英雄的存在である。

父親が営林所長だったので、オーストリア国境に近い「世界で最も美しい」ブレッド湖の村で生まれ、隣の家まで一二キロもあるトウヒの森の中の一軒家で育った。三歳から父にスキーの手ほどきを受け、移動の手段にした。十九歳でアルペンスキーのナショナルチーム入りをしたが、弟のほうが成績がよかった。クロスカントリに転向して、レークプラシッドとサラエボのオリンピックに出場した。八歳から岩登りを始めた。近くにスロベニアの最高峰、トリグラウ(二八六四メートル)があり、スキーの大きい変化に富んだ幅三キロ、

高差一二〇〇メートルの北壁を擁する。

ヨーロッパ各国のクライマーが競って登攀し、七〇〇本のルートが拓かれている。ツベートさんも初登ルートを持っている。ドロミテと同じ石灰岩で美しい白い壁だ。夏は雪渓が残るが氷河はない。

「スキーおたく」になりきれず、クライミングやパラグライダーなどのアウトドア活動にのめりこんだ。社会主義体制当時の利点を生かして、旧ソ連、中国、そしてチベットを旅行し、ヒマラヤ、ヨセミテ、南米の山々を登り、香港で出会ったドイツ人に「日本の秋はものすごく美しい」と聞いて日本にきた。自転車でも日本中をくまなくめぐりながら「スキー滑降ができる頂上や壁はないか」と探し回るうちに、東北を中心とした山スキーに熱中した。

九二年には美しい日本女性と結婚し、日本に住むことになった。スロベニアのスキーメーカーのデモンストレーターをしたり、日本人や外国人を山や谷(沢登りは日本固有の登山スタイルとして気に入っている)に案内するようにになり、本年四月に日本アルパインガイド協会のガイドに認定された。

「日本の山は、どこも美しい、若い人との山行は張り合いがある」という。開発が遅れていることが幸いして秘境の雰囲気が残され、高山植物も豊富で美しいスロベニアの山々や森をぜひ訪ねていただきたい。

エヴェレストの頂上からスキー滑降に成功したカリニチュアル氏とソロクライマーのトモ・チェセン氏との交友や人となりについても触れた。

(松沢 節夫)

ジャック93会

第十五回登山集会

信州の鎌倉と里山を歩く

昨秋の十一月十、十一日、地元在住の金井善男会員の企画と案内で、長野県上田市郊外の里山を舞台に、山行と温泉・古刹探訪の旅に行ってきました。参加者二十四名、九三年同期以外にも多数の方の参加を得て、楽しい週末を過ごすことができました。

初日はそぼ降る冷雨の中を、七転八倒しながら独鉦山に登り、下山後中善寺薬師堂や前山寺三重塔(重文)を拝観しました。そして夜は、親子三代の会員である田沢

温泉「ますや旅館」宮原岳子会員(島崎藤村滞在の宿)のお世話になりました。

翌日曜日は絶好の小春日和のもと、子壇嶺岳に登り、新雪の後立山連峰や八ヶ岳、浅間の眺望を堪能。山麓の大法寺三重塔(重文)や別所温泉の北向観音、安楽寺八角三重塔(国宝)などを見物しました。特に二日目は、信濃支部の松林のり子、渡辺登司美両会員も参加し、キノコや野草などに関心しているろりと教えていただき、里山歩きの楽しさを満喫することができました。

(本田榮三郎)

あなたの「おもい」や「感性」を「カタチ」にしませんか。

—山を知る、編集・制作のプロが直接お手伝いします—

山行記録集をはじめ、紀行・随筆・歌集・句集・詩集・写真集・記念誌などを、お望みの形や様式でつくれます。まずは、お気軽にご相談ください。

参考価格		費用の目安です(消費税別)	
・四六判(天地188×左右127mm)並製本	200冊 500冊 1000冊	・写真集 堂型判(天地200×左右220mm)並製本	200冊 500冊 1000冊
128ページ 68万円 78万円 87万円		56ページ 108万円 149万円 186万円	

■詳しい資料をお送りします。お問い合わせ・お申し込みは—

Tel.075-212-1320 Fax.075-212-1321
E-mail work@skyblue.ocn.ne.jp

編集プロダクション

TAKEUCHI 制作室
GRAPHICARTS & EDITORIAL

〒604-0862 京都府中京区西陣南町4番11号 山崎ビル503号 11月1日現在

東西南北



イラスト・宇都木慎一

南極研究科学 ワークショップに参加して

大野 秀樹

南極に基地をもつ国々が中心となつてゐる国際的な南極研究科学委員会（SCAR）南極に関するほぼすべてのサイエンスをカバーしている）がある。私は、その分科会である「ヒト生物学・医学」ワーキンググループ（WGHBM）の日本代表を昨年から務めてゐる。このたびWGHBM委員長であるアントニオ・ペリ博士（イタリア）が、有名なピサの斜塔そばのリポルノで、第二回イタリア南極・極限環境へのヒト適応ワークショップ（二〇〇一年九月二十四～二十九日）を開催し、参加する機会を得たので、ごく簡単に紹介した

い。

今回は、定期的なSCARミーティング（二年おきに開催され、一昨年は東京で開かれ、今年には上海の予定）の狭間に開かれたエキストラであつたが、WGHBMの正式メンバー十九カ国中九カ国の代表の参加があつた。さらに、各国の高所医学、宇宙医学などの研究者が加わり、イタリアのローカルなワークショップではなく、まさに国際的な集まりとなつた。紙幅の関係で、内容の詳細は省略する。目下、WGHBMのおもなテーマは、遠隔医療と心理学の応用である。いずれも、われわれJACCのニーズと重なる。前者はたとえば、X線写真のかなり細かい陰影が本国に送られ、専門医のコメントを得る段階まで来ている。超高峰登山のベースキ

ャンプで通信衛星（IT）を利用して天気予報などの情報を集めることがそろそろルーチン化しているが、一歩進んでいると思われるWGHBMの技術を応用して、さらなる前進が期待される。後者は、特に南極観測隊の隊員選考に使用されている。WGHBMでの成果をとおして、かなり各国共通なスタンダードテスト（アンケート検査も含めて）ができてゐる。これも、長期間の遠征隊の隊員選考、あるいは国際隊の公募などに応用が可能である。極限状況で人間関係が破綻すれば、隊そのものの崩壊に繋がる恐れがあるからである。因に、さらに閉塞状態にある宇宙飛行士のセレクションにはすでに利用されている。

今回、印象的だつたのは、ロサルバ・マッティ教授（イタリア）の「極限環境における栄養」の講演中、山行での最大の楽しみは食事であるので、栄養を中心にメニューを決めるのは当然としても、その際、各自の嗜好も必ず加味するべきだ、と主張された点である。大いに賛同したい。

今後、機会があれば、会員に役に立ちそうなWGHBMの情報

を提供したい。（医療委員会理事）

二〇〇一年秋の山行

中村 純二

昨年九月、私も夫婦の年齢は合わせて百五十歳になつた。都ホテルなどでは、百五十歳になると宿泊料が半額になる。しかし私どもには、今の間にしかけておきたい山や地域がたくさんあるため、このような特典など、とても利用している閑はない。

九月下旬には、北海道に出かけて暑寒別岳に登つた。増毛町で暑寒荘の鍵を借りて静かな山麓で二泊したが、山中でも暑寒荘でも、人間には一人も出会わず、出会つたのは頂上台地のオコジヨだけであつた。山荘ノートの七月のページに福井支部長の名を見つけたのも嬉しかった。

百名山にはいつの間にか登り終えてゐるが、今回羊蹄山を仰ぐと、新冠雪で数十センチの積雪がありそう。未だ真狩口からは登っていないので、この際ここから登ろうと山麓に着いたところ、晴れた日曜の朝ということもあって、十

数組のそれも中高年の登山者がたむろしているのには驚いた。一昔前に比べて山道は擦り減り、山頂付近の道も大勢に踏まれ、新雪を味わうこともできなかった。山に登るには、人の行かない山城や季節を選ぶべきだと感じた。

十月下旬には、地元岩崎村の知人ら三名と、天幕を担いで白神山地の源流域に入った。燃えるような紅葉の中、徒渉を続けていると、イワナが何匹も足元の流れを泳ぎ、澄んだ水の上を赤や黄の落ち葉が流れ、岸辺にはカモシカが現れ、素晴らしかった。採集したマイタケやナメコの味噌汁を原生林の中の焚き火で味わうのも格別である。十年余り前、雪の山伏岳でたまま出会ったというだけの清水の友人から、高ドッキョウに登りませんかと、との嬉しい誘いを受けた。樹齢八百年というコウヤマキを訪れたあと、高ドッキョウに登り、下りは樽峠ヒュッテで、美味な湧水を囲炉裏の火で沸かし、お茶とお菓子のご馳走に与ったりした。

九州では、照葉樹林を残すことに熱心な知人の案内で、大分県南部のリアス式海岸を歩いた。彼の話では、山中の車道や砂防ダム工事、湾内の養殖や護岸工事などで近年、海はだいぶ汚れてきた由であるが、まだまだ海は美しく、漁船の繋がれている岩壁から、赤や青、黒の魚の泳いでいるのがよく眺められた。私どもは照葉樹林の生い茂る彦岳や、浦戸崎、米内津の空の地蔵、浦江の仙崎などを訪れ、複雑な湾入や、サンゴ礁のある深島など飽かず眺めた。

昨秋は他にも佐渡主脈の峠や上州の子持山などを歩き、クリやムカゴなど山の幸の収穫も楽しんだ。これらと対比して思い出されたのは、一昨年、二カ月間二人で歩いた北欧の旅である。

荒漠たる北極圏のツンドラ帯には、氷河で削られた羊背岩の丘や、湿地や氷河湖が点々と続き、トナカイも群れて素晴らしい眺めであった。高山植物も豊富で、チョウ

ノスケソウやハクサンフウロ、ヒメシヤクナゲなどが咲き、秋に熟れたコケモモやガンコウランの実は氷漬けとなつて、なお新鮮な味を保っていた。北極圏を脱しても、人口より多いといわれる湖に、針葉樹のよく繁る数々の島が浮び、フィヨルドには氷河や雄大な滝が落ち込むなど、まさに自然の国という感じであつた。

まことにスカンディナビアらしい美しい自然ではあるが、わが国と比較すると、地形は単調で、数時間歩いても景観は一向変化せず、裸の岩壁を落下する滝に、霊山の奥床しさは感じられない。降雨量が少なく、生態系は単純で、季節の変化も、夏と冬の二季だけしかないように思われる。

昨秋の山行で、私どもは、改めてわが国の自然の多様さや、こまやかさ、変化の豊かさや四季それぞれの特徴など、再認識させられる形となつた。

いまや、世界的にも貴重な存在となつたわが国固有の、ブナ林や照葉樹林、屋久杉林などは、ぜひ皆の手で積極的に守り、次代に伝えてゆくべきであると、強く感じた次第である。

伊吹山の「播隆祭」

西本 明子

昨秋十一月十日、十一時三十八分、岐阜県の近鉄線揖斐駅に到着。東海支部の皆さんの出迎えを受け、久しぶりに旧交を温め、会員の車に分乗して、長者スキー場へ行く。秋日和の中、紅葉を見ながらの昼食は、稲葉夫人手作りのバラ寿司。懐かしい味と美味しさに、ついおいお代わりをする。遠くからきた人は腹ごなしを兼ねて、今日の宿舎「長者の里セントラルハウス」まで散策としやれる。(長者の里はセントラルハウスを中心にコテージ、テントサイトなどの宿泊施設をはじめ水遊び場、テニスコートなどアウトドア施設が完備。貝月山や鍋倉山へのハイキング、登山、溪流釣り、染織体験などが楽しめる)ところである。

十三時三十分より「播隆上人シンポジウム」が始まる。東海支部稲葉さんの挨拶、講師は扶桑町文化財保護委員であり、播隆上人研究者の勝村公先生。播隆上人は幕末の荒々しい時代に、一般庶民の中に身を投じて教えを広めてゆき、

太い文字の中にマンダラを画き「南無阿弥陀仏」と唱え、極楽往生できると信じていた、播隆上人の心は登山界のメンバーに通じるものがある、などと述べられた。

一般からの参加者もあり、質疑応答では、播隆講は今もあるのか、七墓周り（七カ所に石碑を建てて三カ所は見つかっている）、名号碑はなぜ建てたか、槍ヶ岳に初登頂は文政九年ではないか（年譜は文政十一年になっている）、などの意見が活発に飛び交う。中には先祖とは、墓に葬る必要性、など私たちに身近な話もあり、なかなか興味深い、ありがたいお話であった。

十七時三十分頃より、これまた手作りの「チャンチャン焼き」をメインにその他もろもろのご馳走に加え、「笹」が入るとなお一層話が弾み、遅くまで親睦を深めた。

翌十一日は朝食後、手作りの弁当をいただいて、八時に宿舎前の広場で揖斐川山岳会の方々と合流。いよいよ出発である。

宿の裏より貝月山への登山道があり、揖斐川に沿ってゆくと「熊に注意」の貼り紙があつて少し緊張する。すぐ猿後家渡瀬、少将淵、トチの古木、山犬の穴、忍者の穴、

などの伝説のある旧跡を通過する。特にトチの古木はかなりの年代ものであり、途中から二股になっているもの、天空に真っ直ぐ伸びているものなど、三本あつた。

川に沿って登ってゆくと、渡渉が何度もある。またアップダウンも厳しく、かなりの急坂でロープが幾重にも張つてあつたから、杖よりもロープにすがつて登つたりして、やっと尾根に出た。この東尾根は見晴らしがよく、道も林道のように広くなり、伊吹山、国見岳を見ながらアップダウンを繰り返して頂上に着いた。

頂上は三六〇度の展望だが雲が多く、雪をまとった白山のみがよく見えた。楽しい昼食後、きた道を下りるのだが、登りよりも下りのほうが大変で、思ったより時間がかかる。やっと出発点に到着すると、稲葉夫人をはじめ東海支部の方々から、温かい味噌汁と炊き込みご飯を振る舞われ、至福のひと時を味わった。人心地つき、会員の車で揖斐駅まで送ってもらい、十三時三十分には車中へ。

バンフ・マウンテン・ブック・フィルム・フェスティバル
サッチ・益田

二〇〇一年十月二十九日より一週間にわたり、カナディアン・ロッキーの観光地、バンフで第八回山岳図書、第二十六回山岳映画祭が開催された。

図書祭にはロープを切ったクライマーとして知られる英国のサイモン・エーテス、マロリーとともにエヴェレストに消えたアーヴィングを伯父とするジュリー・ソーマーズ、アメリカのベテラン・ヒマラヤニスト、エド・ウェブスターなどが招待され、講演、セミナーを楽しんだ。

ヒマラヤン・ジャーナルのベラン編集者、インドのハリシュ・カパディアは「山岳地域の戦争と平和」と題するセミナーでカシミール紛争エリアを、インドとパキスタン両国の共同自然公園化構想を語った。

映画祭はスロバキアの若手、トーマス・フマー、メキシコの無名クライマー、カルロス・カソリーニ、英国一九五三年エヴェレスト隊の

最年少隊員だったジョージ・ベント、アフリカで自然公園にとり組むアメリカのマイク・フエイなどが招待されて、延べ一万人の観客とともに映画上映を楽しんだ。

カナダの山岳界で功績のあつた岳人に贈られる「サミット・オブ・エクサランス」賞は二〇〇〇年、日本山岳会とカナダ山岳会合同マウント・アルバータ初登七十五周年記念企画の立案者、カナダ山岳会の副会長・ボブ・サンドフォード氏が受賞した。

二〇〇二年のバンフ・マウンテン・フェスティバルは十月二十二日から十一月三日まで、バンフセリターで開催され、国際山岳年を記念するバンフ・マウンテン・サミットも同時に開かれる。

初冬のバンフはホテル代も安く、世界の登山家とともにフェスティバルを楽しみたい岳人には打ってつけである。日時は未定だが、受賞映画が楽しめるバンフ・ワールドツアーも来春、松本で予定されている。詳細は、

Banff Center for Mountain Culture, Box 1020 Banff, AB, T1L 1H5 CANADA
www.banffmountainfestival.ca

海外の山

2002年、
新年の山々の風景

江本 嘉伸



ヒマラヤの峰々 (ネパールにて)

二〇〇二年新年の幕開けとともに、メディアの目は、カトマンズに注がれる事態となった。

インド国会襲撃事件などでにわか
に印パ間の緊張が高まる中、南アジア七カ国の首脳が一堂に会する南アジア地域協力連合(SAARC)の
第十一回首脳会議が一月五日、この

地で開幕したのである。

パキスタンのムシャラフ大統領が「対話の用意がある」と表明して、インドのバジパイ首相と握手する瞬間の映像が世界に流れたが、バジパイ氏自身は握手はしたものの逆に実行力を伴わないパキスタンの対応を批判、カシミールの所属など積年の両国関係の難しさが改めて浮き彫りとなった。それを裏付けるかのようにこの日、ジャム・カシミール州ではインド軍とパキスタン軍が交戦、十人が死亡した、と報じられた。

昨年九月十一日、ニューヨークの貿易センタービル二棟を微塵にした同時多発テロ事件、そして印パ対立。そういう空気を山登りの世界も影響を受けたいわけにはいかない。八〇〇〇の山々を持つネパールでは、大晦日から「国際山岳年」についての数々の計画、試みが記者会見などの形で発表されたが、いくら山々を大事にしよう、と呼びかけても戦争を前にしては、何も言えない。「山々と生きよう」―それは平穏なる日常を前提にした提言なのである。

そういう環境の中で「パキスタン2002年平和登山」という動きが発表された。シンガポールのフー・スイ・チョウはじめ、言語、宗教を異にする各国の七人のエヴェレストに登頂者たちで、戦争のある国の山に

行つて平和の尊さを訴えたい、と、この夏、パキスタン・カラコルムの八〇〇〇の峰、ガツシャブルムII峰をめざす。昨年七月にはトルコの聖なる山、アララットに登りに行っており、これまでの国際登山隊とは、一味違った登山を志向しているようだ。登山のデザインとして「異文化の融合」というテーマを取り出したことが、「対立」の時代に新しい。

この冬のヒマラヤ登山の中で国際的にも注目された難ルートの中のエネ壁の冬期登攀を目指した日本山岳会東海支部隊(田辺治隊長)は、年明けに残念ながら登頂ならず、の一報がはいった。どの地点で断念したか五日現在ではわかっていない。

アメリカ山岳会が、創立百年を迎え、二月一、二日、ユタ州のスノーバードで記念のフォーラムを開く。建国の歴史は浅い国だが、英国山岳会の影響のせいだろう、日本山岳会より三年早く誕生し、活動しているのはある意味でたいしたことである。百周年を記念して、「あなたは登山で誰に啓発された(インスパイア)か」というおもしろいテーマで会員たちの声を募っており、その結果も知りたいところだ。

八年前、人類の誕生の地をめざして南米大陸最南端のナバリノ島を出発した探検家、関野吉晴がいよいよ

よ五万^{*}の長い旅を踏破、「残る数百^{*}」まで迫り、二月はじめアフリカのラエトリにゴールする運びとなった。まさか、と思う企画がともかく最後まで成就しようなのだから、すごい。ついにながら、前号で紹介した西安からシルクロードを走りつづけた旅人、中山嘉太郎は、十二月二十三日、ボスボラス海峡を渡つてめざすイスタンブールにたどり着いた。自力で走った九三七四^{*}。どんな報告が聞けるか。

登山そのものとは無縁だが、中山嘉太郎と同じ四十四歳になった著名なクライマーの気になる話。ラインホルト・メスナー、イエジ・ククチカに次いでヒマラヤ八〇〇〇の峰十四座に登頂したエアハルト・ロレタンが、自分の子どもを死なせてしまった、という重い事件が起きた。ロレタン自身によれば、泣く子(男の子)を黙らせようと揺さぶったら動かなくなった、という。どういう状況だったのか、詳細はわからないが、世界的登山家が直面した危機、とウエブサイトは伝えている。

「We are all mountain people (われら皆、山の民)」―「国際山岳年」の世界共通スローガンが、十二月、こう決まった。山とは何か、山に住むとは、山に登るとは何か。それらくるんだ言葉だ。

ページ数	上からの人数・名前	誤	正
•支部名			
41	4人目 石村 実	岩手	(空欄)
100	10人目 小西 奎二	岐阜	(空欄)
100	18人目 小原 和晴	福岡	(空欄)
100	20人目 古原 和美	富山	(空欄)
100	22人目 小林 晃	山陰	(空欄)
100	24人目 小林 和之	岐阜	(空欄)
105	20人目 後藤 傳	宮城	(空欄)
105	24人目 後藤 守男	福島	(空欄)

図書受入報告 (2001年11月)

著 者	書 名	ページ・大きさ	出版元	出版年	寄贈／購入別
山と溪谷社出版部(編)	東京周辺の山350:ベストコース	783pp/19cm	山と溪谷社	2001	出版社寄贈
山と溪谷社編集部(編)	今までだれも教えてくれなかった山の悩み相談室	221pp/19cm	山と溪谷社	2001	出版社寄贈
JAC東海支部(編)	東海支部報合本(Ⅱ)東海支部創立40周年記念 No.46-65	570pp/26cm	JAC東海支部	2001	発行者寄贈
JAC東海支部(編)	東海支部報合本(Ⅲ)同 No.66-86:付支部友会だより	575pp/26cm	JAC東海支部	2001	発行者寄贈
鈴木重彦	シルクロードの秘境天山:鈴木重彦写真集	70pp/25cm	東京新聞出版局	1992	鈴木様寄贈
近藤等	アルプスの蒼い空に(上巻):France	277pp/21cm	茗溪堂	2001	著者寄贈
近藤等	アルプスの蒼い空に(下巻):Switzerland, Italy, Austria	293pp/21cm	茗溪堂	2001	著者寄贈
F.マライーニ(監修)	イル・ミラモンド:レンズの向こうの世界	359pp/31cm	バリアイ・ポリスタンパ	2001	イタリア文化会館寄贈
F.マライーニ(監修)	イル・ミラモンド:レンズの向こうの世界	359pp/31cm	バリアイ・ポリスタンパ	2001	東京都写真美術館寄贈
岡崎猷之・他(編)	パトゥーラ I:福岡山の会カラコルム登山隊1999	111pp/26cm	福岡山の会	2000	発行者寄贈
S.テンパーケン	わが道はチベットに通ず:盲目のドイツ人女子学生とラサの子供たち	302pp/20cm	風雲舎	2001	訳者寄贈
千葉大学学士山岳会(編)	根雪:千葉大の山50年	286pp/22cm	千葉大学学士山岳会	2001	発行者寄贈
中庄谷直	関西周辺低山ワールドを楽しむ:Mountains in Kansai	238pp/20cm	ナカニシヤ出版	2001	出版社寄贈
JAC科学委員会(編)	「中高年の高所登山及びトレッキングを科学的に考える」シンポジウム予稿集	24pp/30cm	JAC科学委員会	2001	発行者寄贈
福島正明	中高年者の雪山入門:低山の雪山から夢のヒマラヤまで	227pp/19cm	東京新聞出版局	2001	出版社寄贈
村上金吾	旅と山旅(上巻)	456pp/19cm	村上力(私家版)	2001	発行者寄贈
村上金吾	旅と山旅(中巻)	411pp/19cm	村上力(私家版)	2001	発行者寄贈
村上金吾	旅と山旅(下巻)	446pp/19cm	村上力(私家版)	2001	発行者寄贈
村上と鳥	蔓手毬(句集)	314pp/19cm	村上力(私家版)	2001	発行者寄贈
村上と鳥	渡鳥(句集)	228pp/19cm	村上力(私家版)	2001	発行者寄贈
村上と鳥	山霧(句集)	311pp/19cm	村上力(私家版)	2001	発行者寄贈
村上と鳥	山櫻(句集)	242pp/19cm	村上力(私家版)	2001	発行者寄贈
村上と鳥	山道(句集)	396pp/19cm	村上力(私家版)	2001	発行者寄贈
山口耀久	定本・北ハツ彷徨	269pp/20cm	平凡社	2001	出版社寄贈
大貫金吾	限りなきオマージュ富士山:400回までの登頂記録	318pp/19cm	ごま書房	2001	著者寄贈
Jim Curran	High Achiever: The Life & Climbs of Chris Bonington	264pp/25cm	Mountaineers	1999	購入

図書紹介



イラスト 蜂谷益雄

山と溪谷社・編 『自然との対話』

一九七九年一月から二〇〇一年八月にかけて雑誌『山と溪谷』その他に掲載された対談をまとめたもの。

副題の「24人のトークコレクション」が示すように、その道に通じた二人が十二のテーマについて語り合っている。新しい年代のものから収録されているので、最後は、共に今は亡き小西政継と植村直己の対談になる。逆に戸高雅史と山野井泰史、少し毛色が異なる片山右京と平山ユージ、若者の登山観が吐露された石川直樹と山田淳とたどってゆくと、登山スタイルや思考の変遷が見えて、登山思

想史ともいえる趣がある。田部井淳子と今井通子の女性の立場からの登山談義には、ある種の時代の流れも感じられ、ミニヤコンカの松田宏也とヨットの佐野三治の、極限からの生還者としての言葉は非常に重い。

そして鎌田孝一と根深誠、C・W・ニコルと田中康夫の自然環境への提言、山折哲雄と大森久雄の哲学的な語らいが知的好奇心を満足させる。岩崎元郎とみなみらんぼう、田中澄江と坂倉登喜子、小林泰彦と平野恵理子らが語る中高年、花、低山には昨今の登山の傾向がうかがえ、それぞれの最後につけられた解説がより理解を深めている。

一つにまとめられた二十年余にわたる対談を通して読んでみると、当時見えなかった時代の流れが感じられて興味深い。(泉 久恵)
二〇〇一年八月 山と溪谷社発行 二九三ページ 千四百円

石川直樹・著 『この地球を受け継ぐ者へ』

世界各国から集まった若者たちが、北極から南極までの道のりをスキーや自転車などおもに人力の

移動手段によって旅をするという壮大な計画「ポール・トゥ・ポール2000」に、日本から一人の青年が参加した。

七カ国から集まった八人の、言葉も文化も異なる若者たちが十カ月間にわたって共同生活をしながら続けた旅。日本人青年が綴った旅の日記は、四月五日から始まり、十二月末まで続いている。

旅は肉体的なアドベンチャー要素も多いが、行く先々で様々な種類のボランティア活動をしたり、学校や地域のコミュニケーションなどでプレゼンテーションを一日に何回もこなしたりと、それは多彩な能力が要求される企画でもある。厳しいスケジュールの中でその日その日の出来事、考えたこと、感じたことを綴るということは大変な作業と思われるが、青年は一日も欠けることなく、旅の様子を読者に伝えてくれる。

若者らしく爽やかな文章の、とにかく素晴らしい日記である。これは次代を受け継ぐ若者たちにはぜひ読んで欲しい。そして若干の歳を重ねつつある大人も、中年も共にこの地球(ほし)の自然・環境について、改めてこの日

記を読みながら考えてみよう。

(渡邊 玉枝)

二〇〇一年六月 講談社発行
四五八ページ 千七百円

山村正光・著 『富士を眺める山歩き』

牽強付会な山名を勝手に付し、登っても少しも面白くない山をその市町村におもねって無理に押し込み、県境の山頂には他県のことなどどこ吹く風で自県の県名のみを大書した標柱を立て……。こんな「〇〇百名山」が横行しているのが現状である。これに対して、いくらわが愛する故郷の山とはいえ、そのような都合主義の百名山は言語道断だと、かねて力説していたのが当会山梨支部の山村正光さんである。

その山村さんの著書だけに、一見ありきたりのガイドブックのような書名だが、これが、どうしてどうして、今様のそれとは次元が異なる。十数年前、実業之日本社刊の『車窓の山旅 中央線から見える山』に始まった山村流の蘊蓄がここでも惜しみなく披露されていて、山登りの知的快楽を存分に満足させてくれるのが、この本だ。

さらに「山登りの楽しさはどの山にいったかではない。どんなふうに登ったか、誰と登ったか。これが大きなフアクターである」と書き、百名山を金魚の何とやらのようにつながって歩くばかりが山登りではないことを教えてくれるのも、この本である。(横山 厚夫 二〇〇一年六月 毎日新聞社発行 二二六ページ 千六百円)

平山善吉・著 『南極・越冬記』

日本南極観測の初期に、山屋として最年少隊員で参加し、活躍された平山さんの若き日の回顧録である。

平山さんは南極を横軸に、ヒマラヤを縦軸として建築学会で活躍されている方である。その見識の広さと感性が、専門外のオーロラ、氷河、ペンギン、アザラシの観察などに表れていて、単なる回顧録に終わらせていない書である。

欲を言えば、平山さんにしか書けない、現在の最新の技術を駆使した観測隊と、四十年前の隊との相違、南極とヒマラヤ登山の歴史的関連性と、そこにおける行動の対比について、もう少し触れてほ

しかったと思う。

いずれにしても日大エベレスト隊を指揮して『エベレスト遥かなり』を著した平山さんの原点になる南極の著作である。

初期の日本南極観測隊の裏話も含んだ好著である。(川崎 巖 二〇〇一年十二月 (有)連合出版 発行 三六三ページ 三千二百円)

千葉大学山岳部 千葉大学学士山岳会・編 『根雪』

千葉大の山 五十年

本書は、栄光と苦難の歴史をたどりながら、改革を行い、前進を続けてきた千葉大学山岳部の模様をよく写し出している。

千葉大学山岳部は、前身の千葉医科大学や旧制専門学校の山岳部を継承せず、一九五一年四月に新しくスタートした。二〇〇一年十一月十一日に「創部五十周年記念の集い」が行われ、それを記念して本書が刊行された。

内容は、創部から二〇〇〇年までの国内および海外の登山記録、学術調査の報告、多くの随想、遭難報告と故人の追悼などが収めら

れている。

特色は、登山と平行して学術調査を行い、それを要領よくまとめ報告していることである。今までに植物生態学を中心とした学術調査の報告書が、英文版を含め数多く出版されており、その着実な研究は秩父宮記念学術賞を受賞した。

OB会である学士山岳会では、登山と学術調査は「車の両輪」であると位置づけて、会や部の運営活動を行っているようだ。他にも本書の特徴を述べると、

●山岳部活動を十年ひと区切りとした報告とともに、その時代の

人々による座談会が載っている。

単なる事実の羅列や出来事の解説にとどめず、それぞれの時代の背景が語られているので、部の流れがよく把握できる。当時の写真が載っていると一層理解が深まったであろう。

●部運営の長期的な方針として、現役の海外合宿が組まれ、既に四回行われた。この活動には、国内のみならず海外の山においても、登山の基本を体得しようという姿勢を強く感じる。

●海外遠征では学内にヒマラヤ委員会があり、七次にわたる遠征の

6,000m以上の1,215峰を全て所収 世界初の精密登山地図 完成!!

宮森常雄 著 (ヒンズークシュ・カラコルム研究会)

カラコルム・ヒンズークシュ 登山地図
Mountaineering Maps of the KARAKORUM & HINDU-KUSH
by Tsuneo Miyamori
B全判地図13葉

(付)カラコルム・ヒンズークシュ山岳研究 (宮森常雄 雁部貞夫 共著)

A4変型判・上製美装ケース入 385ページ

◎好評発売中!! 定価(本体33,000円+税)

国内外の多くの登山家・探検家による最新情報を刻み込んだ世界で最も詳しい登山地図がついに完成! 全て経緯度を位置付け、既登峰・未登峰を明示。氷河地帯の知りうる限りの情報も満載。別冊山岳研究では貴重なパノラマ写真に高度と山名を添えて掲載。現地言語による地名山名研究と併せてヒマラヤ全域の知識を提供する。

ナカニシヤ出版

〒606-8316 京都市左京区吉田二本松町2
Tel. 075-751-1211 Fax. 075-751-2665
URL <http://www.nakanishiya.co.jp/>

成果として東ネパールのヌンプー
ル、ブータンのナムシラとツェン
ダカンの初登を成し遂げた。

これら「千葉大の山」は、関係
者にとっては永遠にこころの故郷
になることであろう。

なお、記録の全般にわたって、
メンバーの学部や研究科が記され
ていると、千葉大学山岳部と学士
山岳会の構成員がいかに多様性に
富んでいるかが表現できたと思う。
「根雪」が永遠に輝く氷河に育まれ
るように、永く保存し参考にすべ
き文献である。(五十嶋 一晃)

二〇〇一年十一月 千葉大学学
士山岳会発行 二八六ページ

足高山の会・編

『やまなみよせて』

—足利高等学校山岳部

山行記録集—

県立足利高校山岳部の創設(昭
和二十三年)から平成十年までの
山行記録集成である。巻頭の写真
は詰襟と「学帽」からTシャツ姿
に至るまで、簡潔な山行記録とと
もに、終戦直後から現代までの高
校生の登山史としても貴重なもの
だ。

山行ごとに必ず「反省」が付さ

れている。コース、食料、装備な
どに触れていて、部員たちの正直
で前向きな気持ち語られていて
ほほえましい。

諸般の事情から、高校山岳部の
衰退が伝えられているが、こうし
て五十年以上、たゆまぬ部活動が
続けられている背景には、いろい
ろな幸運や苦労があつたろうが、
足利高校の記録を見る限り、指導
者・顧問教諭の熱意や影響力が大
きいのではないかと感じた次第で
ある。(松沢 節夫)

二〇〇一年一月 足高山の会発
行 五五〇ページ

山カラ2000プロジェクト

『31名ともう一人の キリマンジャロ』

二十世紀から二十一世紀に変わ
る時刻を中心とした日々、キリマ
ンジャロに登りに行った人たちの
登山の記録。高所登山に挑むとい
った悲壮感は二の次にして、ひた
すらグループの人間関係を大事に
して、思い切り楽しもうと考える
人たちが高所登山に挑んだ。総勢
三十一人だが、日本の山で遭難死
した仲間の女性の霊が「もう一人」
であるらしい。

この登山隊の正体はトヨタ自動
車山岳部を軸にして結成された一
群の人々、二十代から七十代まで
年齢層の異なる大集団である。隊
の性格を暗示するのが「山カラ」
という別称であり、「山に登って、
温泉でカラオケを楽しむ集まり」
の略であるという。

この登山記録自体がいかにも屈
託なく作られている。とかく大学
などの若者たち、中高年世代の者
たちが、同一年代の登山集団を作
る傾向の目立つ日本であるので、
年齢を超越した人々たちによる集団
の記録というだけでも興味を引く
のだが、大企業の重役である人物
が率先してプロジェクトを進行さ
せ、しかも記録の最も重要な部分
を詳細に書いたという点に本書の
ユニークさがある。

企業体の中枢にある人々による登
山の奨励と積極的な参加、それによ
って涵養される人間関係。人間
の輪の記録であることを登山記録
に優先させているかに見える本書
は、他に例の少ない個性を帯びる
ものとなった。(宮下 啓三)

二〇〇一年八月 トヨタ自動車
山岳部山カラ隊発行 三〇四ペ
ージ 非売品

ルーム日誌

11月	総務委員会 学生部 アルパ インスキークラブ 会報編集 委員会
1日	
6日	集会委員会 アルパインスケ ッチクラブ
7日	山岳地理クラブ
8日	山の自然学研究会 フォトビ デオクラブ
12日	図書委員会 アルパインスキ ークラブ
13日	常務理事会 アルパインスケ ッチクラブ
14日	理事会 インターネット小委 員会 つくも会 休山会
15日	科学委員会 学生部 98同期 会
16日	集会委員会
17日	評議員会 資料委員会
19日	総務委員会 トイレシンポ小 委員会
20日	図書委員会 百年史委員会 00会
21日	三水会 フィルビデオ委員会
26日	山研運営委員会
27日	総務委員会 96同期会
28日	自然保護委員会
29日	97同期会
30日	総務委員会 青年部 アルパ インスキークラブ 科学委員会

11月来室者 620名

会務報告

十一月理事会

日時 平成十三年十一月十四日(水)

十八時三十分～二十一時

場所 日本山岳会会議室

〔出席者〕 大塚会長、芳賀、長尾、村井各副会長、西村、今村、坂井、高原、朴元、高遠、宮下、鈴木、黒川、大野、中村、藤本、河西、小川各理事、内田、古市各監事、平林、宮崎、宇田川各常任評議員〔委任〕 松原、鳥居各理事、鯉坂常任評議員

〔審議事項〕

一、平成十三年度(第四回) 秩父宮記念山岳賞の授賞(長尾副会長) 審査委員会(木下は雄委員長は本年度候補四件より、山本正嘉氏の「登山活動における運動生理学及びトレーニング科学の確立と啓蒙活動」(別添に業績)により今年度の授賞候補として推薦。(承認) 二、平成十三年度会長特別表彰について (西村)

表彰候補者として、石川直樹会員(二八七二)を推薦し、十二月一日の年次晩餐会において表彰

したい。同会員は平成十二年四月より九カ月かけて、北極点より南極点までの地球半周を世界七カ国の若者とともに、各地域の人々や環境問題と関わりあいながら、スキー、自転車、カヤックなど人力で踏破。また、今年五月にチョモランマに登頂し、七大陸最高峰登頂の最年少記録を二十三歳で達成した。これらのことは、二十一世紀登山の幕開けにふさわしい行動力、チャレンジ精神であり、当会にとつて意義深いものと考ええる。

三、細則の一部見直し・その三 (承認) (西村)

第十条について、第二号「二十歳未満の会員については、年会費を五千円とする」を追加。(承認) 第七条、八条の役員改選の手續きについては多くの意見が出された。過去二回分の意見も合せて集約させていきたい。(継続審議)

〔報告事項〕

一、平成十三年度永年会員(西村) 本年度永年会員予定者は、

津川昌平(三八八五) 藤井保(三九〇六)、榎本進(三九〇七) 小倉董子(三九〇八) 大久保勝巳(三九一〇) 藤木高嶺(三九一五)

室賀輝男(三九二五) 原田幹市(三九四六) 大内来三(三九五四) 古田初太郎(三九五八) 梅棹忠夫(三九六三) 竹内堯(三九七二) 北村武彦(三九七三) 小林雄次郎(三九七五) の十四名。

二、ルーム借り増しに伴うルーム全体の活用方法 (高原) 新たに借りる二階のスペースは当マンションの住主体の形態を考慮し、資料委員会、百年史編集委員会、小会議、談話室を主利用とする。現在ロビー、一〇四号室にある資料、荷物を移動し、ロビーとしての快適性、一〇四号室の打ち合わせゾーンとして充実を図る。

三、東カラコルム・プロジェクト (坂井) 九月理事会に提案、承認された当プロジェクトへの参加は、インド側代表のカパディア氏(ヒマラヤン・ジャーナル編集長)より、正式な計画申し入れ要請があったのでそれに応えたい。(資料あり) なおこの計画について、九月十一日の米国同時多発テロの影響、印パ国境の無確定地域等を考慮し慎重な対応が必要となる旨を確認。

四、資料等使用、名義後援許可願いに対する許可 (西村)

ワインを直輸入しています

主にフランスはブルゴーニュのワインを中心に輸入しています。こだわりの無名ドメースを発掘!! 今、ワイン界に新風を送っています。SO2の少ないピュアなおいしいワインを、毎年フランスに行きドメースから直接買いつけています。素晴らしいおいしさです。ぜひお試しください。全国発送いたします。ホームページをご覧ください。
<http://www.winedou.co.jp/>
トップコンテンツのマキノレポートは山とワインのレポートです。メールマガジンもよろしく。

マキノ酒店有限会社 牧野 菊生
(会員8299番)
千葉県印旛郡富里町日吉台5-10-7
TEL: 0476-93-2200
FAX: 0476-93-7548

●日本ソムリエ協会関東支部ワインアドバイザーコンクール入賞 ●フランス食品振興協会(ソベクサ)認定コンセイエ(小売店のソムリエ) ●ワイン総合研究所公認名譽ワインマスター

総務委員会・高原 ①会員名簿二〇〇一年度版発行作業は予定通り進んでいる。年次晩餐会に配布予定。広告掲載料は百四十六万円となっている。 ②平成十三年度の新入会員オリエンテーションを十月二十七日(土)午

後二時より開催。男女大学生各一名を含む二十七名の参加者があった。二委員会、五同好会の参加で幅広く当会の紹介ができた。

財務委員会・村井副会長

①四月より十月末まで累計の会計報告。順調に推移しているが新入会員勧誘願いも併せてあった。

②財務委員会委員候補として竹中彰会員(二二九八四)が了承された。

集委員会・朴元

二〇〇二年の主催山行。

①二月九〜十一日 八海山スキー

②五月十九〜二十二日 若葉山行

屋久島宮之浦岳

③六月十五〜十六日(未定) 白神山ブナ植樹(青森支部共催)

④九月二十六〜二十九日 知床羅臼岳キノコ山行

会報編集委員会・今村

『山』十一月号の巻頭は明治大学GⅠ、GⅡ峰登頂報告と、ナンガバルバット公募登山。

山岳編集委員会・高遠

今週最終校正予定。広告会社の倒産などがあつたが、関係者の協力ですらなかつた。

資料委員会・鈴木

世界岳都市会議開催記念・アルプス山岳館特別企画展(夏・秋

の二回開催)は十月二十八日終了。入場者は四千四百名を超え、主催の松本市から感謝された。

遭難対策委員会・黒川

①平成十三年全国山岳遭難対策協議会が七月五、六日大分市で開催され黒川が出席。その概要報告。

②学生部指導委員会と共催で、平成十三年度大学山岳部監督ミーティングを十二月六日午後六時半より当会議室で開催。テーマは「大学山岳部の遭難事故を考える」「大学山岳部の部員減少を考える」。

学生部指導委員会・宮崎(鳥居代)

①恒例の学生部マラソン大会を十一月十八日(日)、皇居外周において開催予定。

②学生部のメンバー二名(亜細亜大学、東海大学各山岳部員)が実施したチョーオユー遠征の報告があり、今後、当会として学生(若い人)個人の援助、ケアについて方策を立てる必要性を認識した。

海外委員会・中村

東チベットを訪れた際得たチベット登山協会についての状況報告。

科学委員会・藤本

①十一月十七日開催予定のシンポジウム「中高年者の高所登山及びトレッキングを科学的に考える」

のテキスト配布。

②百周年記念事業として「全国の会員による日本列島中央大分水嶺の一斉踏査」が別添資料により提案された。

自然保護委員会・河西

百周年記念事業として「高尾の森づくり事業」「国民の休日として「山の日」制定運動」が別添資料により提案された。

図書委員会・宮下

第十回「山を語る」を十一月二十日(火)、当会会議室において「スロベニアの登山とスキー」と題してツベート・ポドロガル氏(登山家元スロベニア・ナショナル・オリンピックスキーツーム代表)を講師に行う予定。

山研運営委員会・小川

十月二十八日閉所。今年の利用者は八百三十七名(去年は八百八十名)。来年の開所は大型連休の前とする。

七、その他

アルパインスケッチクラブ(同好会)よりの上高地展覧会開催についての協力依頼 (高原)

毎年上高地山研で展覧会を開催しているが来場者数が今一歩である。安曇村主催で毎年夏前に開催

している上高地音楽祭と関連づけて行えば期待できそうなので、当会に協力依頼があつた。主体はアルパインスケッチクラブだが、バックアップはできるかぎり行うことと確認された。

十月議事録で二部追加訂正

審議事項の「一、細則の一部見直しについて・その二」で「第二十一条の本会の休室日に第二、第四土曜日を追加する。(承認)」を追加訂正する。

■会員異動

物故

中村智彦(二一四四七) 01・5・13
高橋 詢(八八六〇) 01・10・12
古林管子(二二九四九) 01・10・16
小山 貢(六〇三九) 01・10・18
國司吾郎(四二二一) 01・10・23
雨宮淳三(三六二八) 01・11・7
白杉之伸(二〇九〇〇) 01・11・23

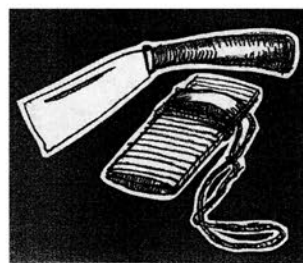
退会

山路岳夫(六六〇二)
長岡次郎(二〇九〇二)
中本 環(二〇九二二)
和田政雄(二一三二三)
石井 勝(二二二五八)

改姓

杉田和子→村上和子(二二五九四)

INFORMATION



イラスト・宇都木慎一

◆屋久島若葉山行 集会委員会

二〇〇二年の若葉山行は世界遺産の屋久島、九州最高峰の宮之浦岳（一九三五）と永田岳縦走を決定します。三泊四日で一泊はテント泊、二泊目、三泊目には約十二時間の歩程となります。非常にいい季節ですが、雨も覚悟、それなりの心の準備を。

日程 五月十九日（日）～二十一日（水）
五月十九日（日） 羽田空港出発→屋久島空港（旅館か民宿泊）

五月二十日（月） 白谷林道→大株歩道→ウィルソン株、縄文杉→新高塚小屋（小屋かテント泊）

五月二十一日（火） 宮之浦岳→永田岳→鹿の沢→花山歩道（旅館か民宿泊）

五月二十二日（水） 予備日で自由行動 屋久島空港発→羽田解散
費用 概算十六万円（含む交通費）

申込 二月十日（厳守）までに、氏名、会員番号、住所、TEL & Faxを明記し、勝山康雄宛（〒三三四・〇〇五七 川口市安行原一六二・三三五）

TEL & Fax 〇四八・二九四・九六四六
定員 二十名

*募集人数が少ないので体力に自信のある方は急いでお申し込みください。計画詳細を郵送後、電話かファックスで確認を連絡します。なお、希望に添えない場合もありますのでご了承ください。

◆初心者のためのビデオワーク

フィルムビデオ委員会 ビデオのデジタル化で、誰でも気楽に鮮明なビデオ映像が作れる時代です。撮影から編集まで、山行記録から作品作りに、ノウハウを学ぶ初心者向け公開講座です。

日時 二月二十日（水） 十九時～
会場 日本山岳会集會室
定員 二十名

参加費 五百円（資料代）
申込 ハガキかファックスで羽田栄治宛（〒一六七・〇〇三）

五 杉並区今川二・二・一
〇 TEL & Fax 〇三三・三九九・三九七五

問合せ 羽田栄治

◆講演会を開催します 96同期会

芳賀氏の入会はマナスル初登頂直後で、遠征も厳しかったとのこと、面白い話が聞けそうです。

日時 二〇〇二年二月二日（土） 十四時～

場所 日本山岳会集會室

講演者 芳賀孝郎氏（日本山岳会副会長）

演題 「JAC入会当時の思い出」
連絡先 遠山元信（TEL 〇四八・七七一・〇〇五三）

◆「山の雪形・雪崩」講演会 緑爽会

山の雪形と雪崩と直接関係はありませんが、雪崩発生メカニズムなどの諸問題について、防災科学研究所の納口恭明氏の講演です。

日時 二月二十二日（金） 十八時三十分開演
場所 日本山岳会集會室
講師 納口恭明理学博士（日本雪氷学会総務委員長）

◆第十一回「山好きの山の絵展」

アルパインスケッチクラブ
会期 二月十七日（日）～二十三日（土）

十一時～十九時
会場 東京交通会館2Fギャラリ
1（JR有楽町駅前）

■訂正 十一月号（六七八号）九ページ、コラムの筆者野口いずみ氏は野口いづみ氏の誤りでした。

十二月号（六七九号）一一ページ三段十一行目の水野晴子さんは永野晴子さんの誤りでした。お詫びして訂正します。

◆編集後記◆

●二十一世紀の幕開けは、連続テロ、空爆と多難なスタートになり、ヒマラヤ登山にも大きな影響が出ました。●暮れから正月にかけて、信濃大町の近くで後立山を見ながら過ごしましたが、例年にない大雪で北アルプス登山は大変だと思いました。正月登山に事故がないことを祈っております。●新年を迎えて会員の皆さまのご健康と安全登山を祈願します。

（今村 千秋）

日本山岳会会報 山 680号

2002年（平成14年）1月20日発行
発行所 社団法人日本山岳会
〒102-0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビュウハイツ四番町
TEL 東京 (03) 3261-4433
FAX 東京 (03) 3261-4441
ホームページ: <http://www.jac.or.jp>
Eメール: jac-info@jac.or.jp
発行者 大塚博美
編集人 今村千秋
印刷 株式会社 双陽社